

ラオス南部の森林政策による焼畑農業への影響分析 ーチャンパサーク県パトンポン郡を事例にー

浅野 悟史

キーワード：GIS、森林政策、土地森林分配事業、土地利用、焼畑農業、ラオス人民民主共和国

1. 研究の背景と目的

本研究は、焼畑抑制のための森林政策が、ラオス南部の焼畑農業に与えた影響を明らかにする目的で行われた。熱帯地域において、焼畑農業は地域ごとに特色をもつ持続的な農法として継承されてきた。しかし、1980年代以降、森林減少の原因と目され、各地で抑制政策が執られてきた。ラオスにおいても、森林保護を目的とした焼畑抑制政策が20年の間に執られてきた(竹田 2008)。

2. 対象地域および手法

筆者はラオス南部、チャンパサーク県内に対象村を設け、のべ2ヶ月間滞在し、聞き取り調査、現地踏査、および悉皆質問紙調査を行った。帰国後はGISを用いて空間分析を行った。また、県森林局や村の代表者への聞き取り調査によって対象地域に効力をもつ森林政策を把握した。

3. 結果

政府は土地利用規制という方法で焼畑抑制を行ったのに対し、県行政は換金作物としてチーク林業を推奨し、焼畑跡地への造林と現金収入機会の拡大を目標としていたことが明らかになった。世帯ごとの悉皆質問紙調査の結果から、政府の行った土地利用規制は遵守されておらず、規制を無視した焼畑農業も継続されていることも明らかになった。チーク林業は受け入れられており、チーク林業の拡大のために焼畑跡地が転用されていた。その結果、焼畑休閑地が消失し、次の焼畑地獲得のためには森林伐採が必要になるなど、森林政策の影響により焼畑農業のシステムが変化していることが明らかになった。また、土地利用の空間分析からは、チーク林の拡大に伴う新たな焼畑の火入れによって、村落内の森林が劣化していることも示唆された。

4. 考察

チャンパサーク県パトンポン郡で行った事例調査から、森林政策ごとの影響をまとめると、以下ようになる。県が行ったチーク林業奨励政策は、対象地域の焼畑休閑林をチーク林に変え、また、焼畑のシステムの一部に組み込まれたことで焼畑の栽培暦が変化した。国家主導の生物多様性保護政策は、対象地域の周辺に一切の利用を規制した保護区を設置し、住民の森林利用のルールの形成を促した。その中には従来の焼畑を中心とした「あいまいな所有と利用」を変えた。さらに、森林法に基づく土地森林分配事業では、村落の境界を明瞭にし、土地利用規制を伴って焼畑農業の抑制および森林の保全を住民に徹底した。しかし、その内容を村人は理解しておらず、焼畑農業は継続し、森林はチーク造林のために開かれている。また、政府側もモニタリングなどを行っていない。森林保全を目指した森林政策によって、焼畑は継続され、森林の劣化が見られた。この原因は、国際世論に左右された森林政策の一貫性のなさである。また、焼畑や休閑林を必要とする農村の現状と国家政策の目標の乖離が重要な課題といえる。

5. 引用・参考文献

竹田晋也 2008, 非木材林産物と焼畑, ラオス農山村地域研究, めこん, pp. 267-299.